様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　9 月　30 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17600006
研究課題名（和文）　ロマンティック・バレエ『ジゼル』を復曲する試み

研究課題名（英文）　Reconstruction of the romantic ballet “Giselle”

研究代表者
石光　泰夫　(ISHIMITSU YASUO)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60093366

研究成果の概要：その初演形態が失われたロマンティック・バレエの代表作『ジゼル』の原初の振付を再現するために、初演以外の場所（ベルリン、ミュンヘン、ウィーン、コペンハーゲンなど）で資料調査を行った。その結果、初演当時の振付の再現にまでは至らなかったが、この作品の舞台面をさまざまな意味で構成していた文化史的・思想的・文学的な背景、また踊りの根本的性格そのものも、その多くを明らかにすることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,600,000	0	1,600,000
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	3,600,000	330,000	3,930,000

研究分野：時限
科研費の分科・細目：表象芸術、細目番号：9005
キーワード：舞踊、ロマンティック・バレエ、ジゼル、女性の身体、ロマン主義、キリスト教と異教

１．研究開始当初の背景

(1)十八世紀末から十九世紀前半にかけて、新しい技法の発明に伴って舞踊のスタイルが一新され、いわゆるロマンティック・バレエが隆盛を迎えることになったが、この舞踊のスタイルはまた、社会的・家庭的にコード化され，それにむりやり従わされてきた身体と、自然によく親和し、言葉を容易に乗り越え、非キリスト教的ともみなされることも多かった身体の両方に引き裂かれた女性の身体的存在が発するきしみ、断裂をじつにあざやかに表象するものでもあった。ところがロマンティック・バレエの身体そのものを、そういう方向での解釈するという視点が復曲云々以前にまず欠落しているという研究状況があった。

(2)そうした根本思想を持つロマンティック・バレエの文字どおり代表作である『ジゼル』は，現在でもバレエの重要なレパートリーであり続けていて、現にもっともポピュラーな作品のひとつであるが、19 世紀末にプティパが大きく改訂した版のみで上演され続けてきたため、(1)で述べたような意味での女性の身体の革新的表現という側面が覆い隠され、見えなくなってしまっているという状況にある。初演当時の『ジゼル』の姿を彷彿とさせるものは、現存のパフォーミング・アーツの内部ではもうどこでも覗うことができないという、きわめて閉塞的な状態が研究

開始当初の背景としてある。

２．研究の目的

(1)プティパによる古典主義のスタイルが混入しない、本来のロマンティック・バレエの姿を『ジゼル』において再現すること。そのために、『ジゼル』の初演時の上演形態を復曲・再生すること。これが研究のもっとも基本となる目的である。その復曲・再生の仕方は、単に振付を明示した台本の再構成を試みるのにとどまらず、できればそれを舞台にかけて、身体上のパフォーマンス，もしくは出来事として，現代の時空間のおいて可視化できるようにすることをもめざした。

(2)『ジゼル』の純粋な初演形態が明らかになれば、現行の上演形態が覆い隠してしまっている、ロマン主義の頃に女性の身体に入った亀裂とその表象の意味を、身体論的、精神分析学的，哲学的、あるいは社会史的にはっきり言語化できるようになるはずである。そうなれば、哲学に残された最後のアポリアである性差の問題も含めて、現代でもきわめてアクチュアルな、女性の「表現する身体」という難問を，これまでに見られなかったような地平において解釈し直す手段が得られるであろう。

３．研究の方法

(1)まずは上演台帳のような形で初演当時の各種資料が残されているはずであるから、それをできるだけくまなく踏査することをめざした。そのさいに、初演の場所であるパリ・オペラ座はもう十分に探索されつくしていて、なおかつ復曲に有効な資料が出ていないので（ロマンティック・バレエの復曲かとして名高いラコッタは、『ラ・シルフィード』や『ファラオの娘』や『影』の復活上演には成功していても、『ジゼル』には結局手をつけていない。資料が乏しくてできないのか，あるいはプティパ版を尊重するあまりなのかは不明である）、初演のパリ公演を打ち上げた後、中央ヨーロッパの近隣の都市で、ほとんど初演の形のままで『ジゼル』は再演されているので、むしろそういう都市の劇場、演劇博物館などでの資料を探すことに重点を置いた。具体的にいうと、ベルリン、ロンドン、コペンハーゲン、ミュンヘン、ウィーン、ミラノなどである。

(2)直接の上演資料ではなく、当時の新聞、雑誌の批評、あるいは文学作品、あるいは個人のエッセイや日記，またはドガなどの絵画作品に、かえって初演形態の詳しい描写がある可能性があるので、そうした二次資料からの初演形態の再構成も重要なステップとなった。

(3)当時のバレエの教則本などが絵入りで、その頃愛好されたステップを紹介・保存しているので、上記(1)(2)で得られた知見をもとに、個々の場面のステップのシークェンスをシミュレートすることを試みて、他の、舞台装置や衣裳の資料ともあわせて、舞台の全体と作品の流れをトータルに再現することを最終的には試みることにした。そこまで踏み込まなければ、『ジゼル』に色濃く漂っている，女性の身体をめぐる革新的な思想は眼に見えるものにまでならないと考えてのことである。むろんそのさいに、ラコットによる前述の、他のロマンティック・バレエ作品の復元を参照することはきわめて重要なプロセスであった。

４．研究成果

(1)上演の一次資料の踏査は、ベルリンやウィーンなどではある程度の成果を得たが、大半の資料は散逸しており、舞台の再構築にまで至れるほどの満足すべき成果をあげることができなかった。そして、そこから逆に、プティパが『ジゼル』に大幅に手を入れたときに参照したはずの初演形態の資料をどうしても探索・閲覧せねばならないという必要性を痛感したが、今回はペテルブルグのキーロフ劇場にまでは探査の足を伸ばすことができなかった。

(2)むしろ今回は、パリで習得した『ラ・シルフィード』を、著作権の関係でいわば自前で作り直し，その初演形態を今に伝えるデンマーク・ロイヤル・オペラに残したブルノンヴィルの足跡をたずねるところで大きな成果が得られた。この振付家が、『ラ・シルフィード』や『ナポリ』で今に至るまで残し得た，いわばデンマーク製のロマンティック・バレエの舞踊の骨格が、『ジゼル』やその他のパリ版ロマンティック・バレエに色濃く見られる反キリスト教精神をいっそう露わにし、土着の宗教によってむしろ裏打ちされているという事実が、コペンハーゲンで閲覧・入手できた資料によって再確認されえたのである。それはまた、端的には、『ジゼル』を構成するコアの部分にある北方ロマン主義との結びつきを鮮やかに浮かび上がらせることでもあった。『ジゼル』そのものは残念ながらこの劇場でもプティパの改訂版が上演されているばかりだが、ヴァーグナーの楽劇（『マイスタージンガー』や『ニーベルンクの指環』の一部）なども熱心に紹介して当時の中央ヨーロッパの文化紹介の立役者になったブルノンヴィルの足跡は、今回『ジゼル』にも息づいていることが確認できた北方ロマン主義の役割をくっきりと体現するものであり、それはまたコペンハーゲンをあらためてロマンティック・バレエを考えるうえでもっとも重要な場所たらしめるものでもあった。これはコペンハーゲンで得られた望外の、今回、もっとも大きいといってよい成果

であった。
(3)当時のバレエ教則本に記載のステップを、専門のダンサーに実際に踊ってもらい、それをビデオに録って、当時の資料から再構築されうる振付にまで編集し直すという試みは、残念ながらそのすべてを実現するまでに至らなかった。個々のステップの収録と編集ソフトへの取り込みまではできたのだが、それを構築する際の指針になる資料が，一次、二次とも十分に得られなかったためである。しかしこれはそうした資料のさらなる探査によって当時の振付がある程度明らかになれば、残りのステップにまで容易に進めるというところまで準備ができているということを意味する。したがって、今後の努力次第で、舞台にかける可能性も依然として開けている、というところまでは実行できたと自負してもよいであろう。別の言い方をすれば、完成したところまでのデータは共有する準備があるので、後進にそこまでは道を切り拓きえたというべきであろうか。
(4)『ジゼル』を完全に復曲して舞台にかけるという形では、研究の目的を実現することはできなかったが、とくに(2)が大きなヒントになって、『ジゼル』という、その初演形態がよく分からない作品において、プティパによるいわばマスキングのヴェールをかいくぐって、その根本思想を正しく解釈し、かつまた言語化するすべをえられたというのが、今回の研究のもっとも大きな成果であったと信じる。それは、プティパによる改訂という上塗りを，今回のようにさまざまな角度からじっくりとはがしていく努力を丹念にすることによって，はじめてみえてきたアスペクトともいうべきものであり、直接の復曲にまでは至らなくても、覆い隠されていた作品の精神が露わになることによって、いわば精神的復曲が可能になったというべきものであろう。今回のこの、いわば思想的な成果は，当然文字のかたちで公表されることを要求している。その言語化はまた、19 世紀の文学や絵画、その他の芸術作品において色濃く表われている、女性の身体における革命の意味，そこにおける抑圧と抑圧されたものの回帰の相克をあらためて問い直すことでもある。そのような解釈の地平でロマンティック・バレエを捉えた研究はこれまで皆無であるので、そういう意味ではまったく新しいバレエ史を書く準備がこの研究によって整ったともいってもよい。それらの成果は、論文によって少しずつ明らかにするという形ではなく、近刊の単著によって一気に呈示する予定でいる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　3 件）
<u>石光泰夫</u>、カフカによるベンヤミン批判、「大航海」、第 50 号、128-135 頁、2004 年
<u>石光泰夫</u>、浄瑠璃における声と音、「文学」、第 5 巻第 2 号、4 -19 頁、2004 年
<u>石光泰夫</u>、シンポジウム　作業と仮説――現代演劇の地平、「舞台芸術」、第 15 巻、158 -205 頁、2009 年

〔学会発表〕（計　　1 件）
<u>石光泰夫</u>、ニーチェにおける意志としての芸術、日本ショーペンハウアー協会、2008 年 11 月 29 日、立正大学大崎校舎

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　0 件）

○取得状況（計　　0 件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
石光　泰夫（ISHIMITSU YASUO）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60093366
(2)研究分担者

(3)連携研究者